

育体系の構造→(c)人間類型の影響を大枠として、四つの構造的指標につき分析のメスが入られる。(a)では、天皇制半絶対主義的ブルジョア権力の台頭、国の主導になる教育財政、学歴別労働市場の形成、非国家的価値コミットメントの現出が、(b)では教育目標構造の整合性が部分的に喪失したこと、教育費の調達・支出構造の若干の変化、学校制度の上向的拡大と統合化、非合理的価値と合理的能力をアンビバレントに内面化する人間類型の産出が、(c)では、学歴エリート・ミドル層の拡大、大衆教育水準の向上が、それぞれの節項で触れられている。

ここではサブタイトルの羅列程度の紹介しかできないが、近代化後期の分析は同前期と比べて、いくらか迫力に欠けるきらいがある。著者は大正・戦前昭和期の教育・政治・経済・文化について該博な知識をもち合わせているのに、なぜこのようになったのか？ 臨時教育会議以降を後期にして前・中期を再編成した方がよかったのか？ この時期については、構造的指標を修正すべきであったのか？ 昭和10年代の政策・産業社会の形態・教育に関する諸資料が出揃わないため分析

が保留されているのか？

(4) 近代化の行方……この最終章は第2次大戦の敗戦から今日にいたるまでの時期を扱っている。近代化の再出発、教育体系の近代化、近代化後期の人間類型、の三節で構成されるが、僅か14頁で戦後の教育を近代化の観点から叙述されているため、徹底した議論を展開することは容易でない。著者がポイントをおいている事項は、高学歴化とその帰結であると思われる。高学歴化のプラス、マイナス両面が指摘されるが、後者がより強調され、学校不適応現象、受験文化とその影響などが議論される。最後の節の筆致は、成功より失敗、始動より終末と、量的充実を遂げた日本の学校教育が陥穽の淵にあり、したがって暗いイメージを思わせる。

ふつう縦糸で綴られる近代化過程が、この本ではそれに横糸（体系間の影響関係と構造的指標）を編むことによって、学校教育の推移と他の社会的諸機能との関連で鮮明に描き出している。この本の最大の特徴がそこにある。

◆ A 5判 240頁, 1800円, 第一法規

書 評

布施鉄治編著『地域産業変動と階級・階層』

一炭都・夕張／労働者の生産・労働—生活史・誌—

埼玉大学 久富善之

地域社会モノグラフの稀にみる力作

本書は、編著者布施鉄治氏を中心とする研究グループが、1973年から81年に、北海道夕張市で取り組んだ「地域総合調査研究」をまとめたものである。800頁を超える大冊は、現代日本の産業都市の実相を、総体的かつ克明にとりおさえる地域社会モノグラフとして稀にみる力作となっている。

書名とその副題とに、本書の内容の中心点が適切にも要言されている。つま

り、著者たちは、今日の地域社会をとらえる中軸に「地域産業変動と階級・階層」問題をおく。産業都市・夕張をとらえるにあたっては、まず「日本資本主義発展と石炭産業の動向」（第1章）を、国家のエネルギー産業政策、技術革新と「合理化」、「労資の階級的拮抗関係」を含めておさえる。ついで「地域社会の基礎構造とその変動の諸相」（第2章）を、上の諸動向の地域社会への定植・変動の過程として、とりわけ住民諸階層の定置・

変動・再編の構造としてとらえている。第3章～9章は、夕張地域社会に現に生きている勤労者・賃労働者の各階層（北炭H鉱と三菱M鉱との鉱員・職員・組夫層……3・4章，自営業者層……5章，誘致企業労働者層……6章，失対労働者層……7章，生活保護世帯層……8章，自治体労働者層……9章）について，本研究の主要方法戦略である「生産・労働—生活史・誌」分析によって，ケース面接データの系統的かつたんなんな整理・叙述がなされている。本書の後段（第10章以降）は，労働者諸層の家族生活とそれをめぐる問題点に焦点をあてた分析（10章），各層の子弟への教育期待と高校生の生活史・誌へのアプローチ（11章），札幌へ移動した炭鉱離職労働者のその後の生活誌の分析（補論），地域政策・地域計画への地域社会諸勢力の意向と展望（12章），という内容になっている。

著者たちは，地域住民諸階層の「生活史・誌」レベルに下りた所に，社会構造と階級・階層問題との確実な接合面を見い出すとともに，その所に，人間生活に対する歴史的社会的客観的規定性と，現代を生き抜く人間の主体的文脈との重なりをもとらえようとしている。編者はそれを「『マルクス主義的な構造分析』の手法と，ウェーバー的な理解社会学の手法をあわせもった分析方法」（「はじめに」）とも述べている。序章・終章に理論的に展開され第1～12章・補論に貫かれた本書の方法視角の社会科学的な大きさと骨太さ，及び「実証社会学」と称する著者たちグループの調査研究に注いだエネルギーの巨大さ，の二点は，そこに浮き彫りにされた炭都・夕張に生きる人々の苦渋の労働・生活の実相とともに，読み通しての第一の印象であった。類例をみることの少ない社会学的実証研究の貴重な成果であると考ええる。

大著を教育社会学の立場から読む

本書刊行以来，社会学や隣接諸学の立場からすでに10篇をこえる書評が公にされており，浅学非才の評者が駄文をつけ

加えることがためられるほどである。しかし『教育社会学研究』誌上にせった多くのスペースを与えられたので，この大著を教育社会学の立場でどう読むか，を考えたい。

無論，本書自体は，教育社会学といった一特殊領域を主要テーマとするものではなく，むしろ社会学をもこえて社会科学全体にとっての「社会と人間」を射程におくものと言えよう。しかしそこにこそ教育社会学的問題論が浮かび上がっていると考える。

「生産・労働—生活史・誌」分析の教育論的意味

城戸幡太郎はかつて「教育科学とは，社会の発達を人間に集約して研究する科学である。教育の理念は発達であるが，それは単に個人としての人間の発達ではなく，社会の発達と関連しての人間の発達である」（「個人の発達と社会の発達」）と述べていた。子ども・青年や成人が発達しつつあるというとき，それは一見個人に属することがらのように見えながら，実際には，彼等の生まれながらの資質や個性に即しながらも，歴史的社会的な発達している，という文脈が貫いている。個々人が客観的に背負う発達の課題は，その歴史的社会的な発達課題に深く根ざしているのである。

「社会の発達を人間に集約して研究する」と文章にすれば一行であるが，教育科学における発達研究は，かたや個人心理学の発達論・発達段階論，こなた社会の価値・規範・役割の内面化としての社会化論，に二極化し（ピアジェのデュルケム批判問題の未解決を想起せよ），社会の発達課題が個人の発達課題へと転換するドラマのフィールドを必ずしも見い出せてこなかった。布施氏らの提唱する「生産・労働—生活史・誌」分析は，教育の科学研究が本来求めてやまない「社会の発達と個人の発達」問題への本格的切り込みになっていると考える。

たとえば本書で，炭都・夕張における勤労諸階層の労働生活と家族生活は，著

しく「苦渋にみちた」ものとして描き出されている（安楽に生活を享受している姿は出てこない）。その「苦渋」は、個人や一家族が偶然に被った苦しみとしてではなく、まさに歴史的社会的規定性をその「生活史・誌」に刻み込みながら生きる人間の苦闘として叙述されてくる。それは、個人・家族の人間の苦悩であるにとどまらず、歴史的社会的発達課題を、階級・階層的規定性において客観的に背負うがゆえの「苦渋・苦闘」に他ならないことが示されている。

3章2節「H鉱直轄鉱員層の事例分析」を例にとれば、31の対象ケースについて、出身地、出身階層、学歴、職歴移動、夕張来住、炭鉱入職、入職後の職種、技術教育、結婚、家族生活史、社会関係、将来展望、労働組合員史、労働組合への評価、機械化と労働集団変容、就労状況、労働条件の問題と解決法、国への要求、支持政党等の項目についての聴き取りデータが整理・分析されている。そこには、地域産業変動、戦争、エネルギー政策転換、機械化・「合理化」、労働運動等の歴史の中に階級・階層的規定をうけながら、生き抜く労働者の「生の証し」が刻み込まれている。とりわけ、来住・入職過程における生業追究や、機械化の中での「先山」制の後退と新しい労働編成・過密労働の実態等のリアルな記述の中に、「苦渋に満ちた生の証し」とは、社会の発達課題を背負うがゆえに他ならないことが浮かび上がっていると考える。

住民諸階層ごとに、また階層内においてもいくつかの型によって、そうした苦渋と課題の様相は異なって描き出される。それらの全体を通して、人びとの現実の生活がもつ課題性と創造性（主体的文脈）は、その十全なる認識と組織のあり方を、企業、労働組合、自治体等社会諸機関の中に定置してはいない。「両者の間に大きな乖離が現実の問題として生じている」（終章）と結論されている。しかし、その「乖離」を理論面・実証面で直ちに埋め切れないことをもって「生ずるような、何らかの問題論再構成が求

産・労働—生活史・誌」分析の意味が失われるのではなく、社会の発達課題が、個人の発達課題へと転化するドラマの舞台を、地域産業変動の中での階級・階層における「生活史・誌」に見出し描き出した点に、本書の最も深い教育論的意味があると考えられる。

「社会移動と教育」問題の再構成として

「生活史・誌」分析では、親の階層、本人の学歴、職歴、地域移動、技術習得、子弟の教育状況と期待、等が取り上げられている。第3章～9章と補論における約300事例のデータは、それ自身、世代内・世代間の、地域的・階層的な社会移動（social mobility）、及びそれと教育（学校教育、職業訓練、企業内教育を含む）とのかかわりに関するぼう大なデータ集積となっている。（本書各章から、その部分のみ抜き出して、この問題だけの系統的再整理・分析を、といった欲も出る。）しかし、この点での本書の特徴は、面接データのぼう大さにあるのではない。

従来、教育社会学における「階層移動と教育」研究は、職業・収入・財産・社会的威信等を指標として序列化された階層秩序を措定し、そこにおける世代内・世代間の上昇・下向・平行移動を問題にしてきた。そこでは、学校教育が、社会の階層秩序を再生産する機態を担うものとして（その働きを肯定するにせよ、告発するにせよ）とらえられてきた。

本書における階級・階層の把握は、抽象的序列を排して、具体的存在様態において、つまり資本主義の発展の下での階級的拮抗関係に規定されつつ変動し、そこに生きる人々の主体的文脈を重ね合わせるものとしてなされている。そのことは、社会移動が、抽象的な上昇・下降としてではなく、苦闘と課題を伴う具体性において把握されることを意味する。教育社会学の「社会移動と教育」研究が、階層ヒエラルヒーと学校ヒエラルヒーとの機能循環論の一つの行き詰まり（評者は「行き詰まり」と観察している）を脱

められているとすれば、ここにその一つの方向が示唆されてはいないだろうか。ここでは、諸階層にとっての学校教育の意味が、抽象的な階層上昇手段としてではなく、具体的課題性を帯びて甦ってくる。それはちょうど、戦前東北農民とその子弟にとって、北方性の生活綴方運動が有した意味を想起させるものである。

本書における固有の教育問題へのアプローチであるところの第11章において、「父母の子弟への教育期待」と「高校生の生活史・誌」の部分が、（評者の表現で言うと）「学校教育をめぐる抽象化と具体性復興とのせめぎ合い」について比較的無自覚である点がやや残念である。「生産・労働—生活史・誌」分析を基底においた上での、地域教育問題へのより総合的なアプローチに、著者たちグループが着手される日を期待を持って待ちたい。

「生活史・誌」分析と、意識・価値・文化

序章には、「資本の価値増殖の論理にそった価値志向」と、「それを止揚せざるを得ない人間的価値志向」との対抗が述べられている。このような価値葛藤を、人びとの「生活史・誌」において具体的にとりおさえようとすれば、社会学

で「社会意識論」「文化論」と呼ばれる固有の領域を分析枠に取り込む必要がありはしないか。それかあらぬか、面接事例で対象者の生活意識・社会意識にかかわる叙述が他の部分に比べてやや平板との印象を受けた。先の「乖離」をめぐる困難についても、労働組合のあり方に焦点化されながらも指導部だけに帰すことのできない問題、「資本—賃労働関係の熟化」の一句に含まれながらも表現し切れてない問題があるのではないか。人間生活への外側からの規定が、主体に内面化しその行動と意識をまき込んだ生活のあり方として常態化する、その通路は同時に、「規定し返す」人間の自律性・創造性が留保され析出するポイントでもあるだろう。だとすれば、このレベル（たとえば「社会意識」や「生活文化」として問題にされてきた）におけるせめぎ合いが、積極的に分析射程に入れられるべきではないだろうか。こうした提起には、著者たちは別の解答を用意しているのかも知れないが、その点が読みとれなかった。

大部な力作のため、十分に読解したかどうかの自信が持てない。誤読にもとづく妄言があればお許し願いたい。

◆A 5 判 836頁, 15000円, お茶の水書房